

# 羽衣と生き返った娘——変換形と宇宙像——

大林太良

## 一、はじめに

伝説あるいはそれにもとづく説話の比較研究によって、我われはさまざまなることを知ることができる。その一つは、その土地の物の考え方を知ることである。私は以下において、一つの接近法を提唱したい。

同一の土地において、しかも同じ時代、あるいは比較的近接した時代にこの土地を舞台として語られた、あるいは記録された複数の話が、たとえば通常の人間とそうでない者との結婚とか、あるいは天降りというような共通の要素をもっている場合、これらの話は、その他の点において、いかに表面上相違していても、実は一つの話は他の話の変換形 transformation という関係にある場合がある。そして、これらの二つあるいはそれ以上の互いに変換形の関係にある話を比較研究することによって、その土地における物の考え方を知ることができるであろう。

これから、中国と日本の例を、それぞれ一対の話を挙げ、分析を

試みたい。

## 二、予章の二つの話

第一の舞台は、中国江西省の予章である。揚子江中流に位置し、水と山と平地の相交るところにある予章は、その境界的な位置にふさわしく、昔からさまざまな魍魎魍魎の跋扈するところであり、また怪しげな巫祝の跳梁するところであった。したがって『後漢書』列伝第四七の樂巴の伝によれば、

「遷りて予章の太守たり。郡土に山川の鬼怪多く、小人常に皆産を破り以て祈禱す。巴素とより道術有り、能く鬼神を役す。乃ち悉く房祀を毀壞し、姦巫を剪理す。是に於て妖異自ら消ゆ。百姓始めは頗る懼を為すも、終に皆之を安す」というような有様であった。

この予章を舞台とした怪奇な話は、いくつもあるが、ここではそのうち二つを取り上げたい。

第一は、晋の干宝の『搜神記』巻十四に載っている羽衣の話（第

三五四話)である。

「予章郡新喻県(江西省)に住む男が、田の中で六、七人の娘を見かけた。みな毛の衣(こゝろ)を着ていて、鳥か人間かわからない。そばまで行って行き、一人の娘のぬいでおいた毛の衣をかくしてから、さっと近寄ってつかまえようとした。鳥たちはみな飛び去ったが、一羽だけは逃げる事ができない。男はそれを家に連れ帰って女房にし、三人の娘を生ませた。

その後、女房は娘たちに言いつけて父親にたずねさせ、毛の衣が稲束を積んだ下にかくしてあることを知ると、それを見つけて出し、身につけて飛び去った。

それからまた時がたって、母親は三人の娘を迎えに帰って来た。すると娘たちも飛べるようになり、みな飛び去ってしまった。」

(竹田、一九六四、二七〇)

この『搜神記』の羽衣の話と殆ど同じものは『玄中記』にも出ている。

予章を舞台としたもう一つの話は、唐の『広異記』に載った「生き返った娘」の話であって、その粗筋は次のようなものである。

江西の吉州に劉という属官がおり、娘が三人いた。長女は十二歳のとき病死した。劉とその同僚の高広は、ともに任期が満了し、それぞれ船をやって一緒に都に帰ることにした。劉は船に娘の棺も一緒に乗せて旅をつづけていたが、予章に停泊中、夜のうちに氷で航路がふさがれ、進めなくなってしまった。そこで劉の船と高の船は、並んでつなぎとめ、両家の人々は、互いに訪れあって、無聊をなくさめていた。

すると、高広の二十過ぎの息子のところに、劉家の下女という美少女が来、この下女の仲介で、劉家の娘が高家の息子のところに会いにやって来て、こうして二人は愛し合った。しかし、この劉家の娘とは、実はあの死んだ娘なのであった。一ヶ月あまり情交がつづいたとき、彼女は自分で、私は死者であると男に打ち明けた。男は驚きながらも喜んで、末長く夫婦になろうと言った。この三日後、娘は生き返った。あの下女も実は死人で、娘よりも前に死に、その棺もやはり劉の船中に置いてあった。生き返った娘は、下女の棺の前で、泣いて別れを告げた。両家は吉日を選んで、その地で二人の婚礼をあげた。二人の間には、数人の男の子が生まれた。これ以来、予章のこの土地は、礼会村と呼ばれるようになった(駒田、一九八二、二五―三〇)。

一見したところ二つの話は、大変違っている。しかし、私の考えでは、この二つの話においては、両者に共通の六つの項目が、同じような順序で展開している。しかし、共通の同じような項目とは言っても、微妙に相違しており、一方が他方の変換形という関係にあるのである。

まず第一に、水上で男女が出会うという項目がある。この一般的な点では羽衣も、生き返った娘も同じだが、細部においては相違がある。つまり、羽衣の場合、女が田にやって来、男も田にやって来、別々に来た男女が田で一緒にになる。ところが、生き返った娘では、水上に男の船と女の船とがすでに並んでいたが、そのとき女が男のところに来て一緒にになったのである。

第二は、出会った男女が、それぞれ異なる世界に属していることである。この場合も、その異なる世界が、二つの話では相違している。つまり、羽衣の場合は、天女と地上の男であり、生き返った娘の場合は、生者の男と死者の女である。

第三の共通の項目は、男女が結ばれることである。しかし、ここでも、羽衣の場合は、強制的に結ばれたのであって、毛衣をとられた女は、やむなく男と結婚した。ところが、生き返った娘はそうではない。彼女の方から積極的に男のところへやって来たのであって、二人は合意によって結ばれている。

第四は、秘密を打ち明けるという項目である。羽衣の場合、男は毛衣を隠し、その所在を妻に教えない。そこで女は子供を使って聞き出した。つまり、秘密は、消極的・間接的に明かされたのである。これに反して、生き返った娘の場合、女が自分から、私は死んだと男に打ち明けている。秘密が、積極的・直接的に明かされたのである。

第五は結婚という項目である。男女が結婚したことは、二つの話に共通している。しかし、羽衣の場合、妻、さらに娘たちは、男のところから立ち去り、結婚の結末は分離である。これに反し、生き返った娘では、二人は正式に結婚し、未永く添いとげるから、結合である。

最後に、第六の子供という項目がある。二つの話では、どちらも子供が生れている。しかし、羽衣の場合、生まれたのは三人の娘であり、生き返った娘の場合、数人の男の子である。この相違は、父系制をとる中国社会においては極めて大きい。つまり、羽衣の男に

は子供があっても、娘だから、男の家系は断絶してしまい、不吉であるが、生き返った娘では、高家の家系は、息子たちによって継承されて行き、めでたい結末になっている。

このように、同じ予章を舞台としながら、羽衣の話と生き返った娘の話は、大きな対照を示し、いわば、内容的に、相補い合うような関係にある。この関係は、二つの話の社会的背景についても言える。つまり、羽衣の話の主人公は、農民層の男である。ところが、生き返った娘の主人公たちは、官僚の家族である。農民と官僚は、中国社会を構成する二大要素である。してみると、この二つの話は、一方が農民、他方が官僚で、両者相俟って全体社会を構成する、という意味においても相補的である。

さらに、二つの話の内容を考えてみても、世界は生者と死者から成り立つことを、生き返った娘は語り、羽衣は、宇宙は天界と地上との二つの領域からなることを示している。このようにして、この二つの話を併せ考えると、世界の構造が浮び上ってくる。

### 三、『丹後国風土記』の羽衣、浦の嶋子

いま見てきた予章の二つの話のように、同じ土地を舞台とし、ほぼ同じ時代に語られ、あるいは記録され、かつその二つが、一方が他の変換形であり、また両者が補完的な関係にある、という話は、中国に限られているわけではなく、日本にもある。

ここでは私は、丹後国を舞台とした二つの話をとり上げたい。一つは、これも羽衣の話で、もう一つは、筒川の浦の嶋子、つまりい

わゆる浦島太郎の話で、どちらも『丹後国風土記』逸文にのっている。また、どちらも、異なる世界に属する人と人との間の関係が語られている。

この二つは、いずれも周知の話だから、筋の紹介は簡単にしておく。まず、羽衣の話は次のようである。

丹波郡の比治山の頂上の真奈井に、天女が八人天降って水浴した。そのとき、和奈佐老夫、和奈佐老婦という老人夫婦が、一人の天女の羽衣を盗んだ。この天女は天に帰れず、老人夫婦の養女になり、十余年も一緒に暮した。この天女は酒造りが上手で、その酒を飲めば、どんな病氣も治る酒だった。人々は争ってこの酒を求め、老人夫婦は富裕になった。

すると、夫婦は天女に向い、お前は私たちの本当の子供ではない、出て行け、と言って追い出した。

天女は人情の酷薄を嘆き、天を仰いで、

天の原 振り放け見れば

霞立ち 家路まどひて

行方しらずも

と歌った。天女は放浪を重ねたが、最後に、竹野郡の船木の里奈具村に行った。彼女は村人に「ここに来て、私の心はやつと平靜になりました」と言つて、この村に留まった。これが、奈具社に鎮座している豊宇賀能売命である。

次に、浦の嶋子の話は、以下のような筋である。お伽話の浦島太郎とは、亀を助けるなどの要素がないなど、若干の相違がある。

与謝郡日置里の筒川村に、日下部首などの祖先にあたる筒川の嶋子がいた。雄略天皇の時代に、嶋子は独り小舟に乗って釣りに出かけ、三日三晩たつても魚一尾釣れず、ただ、五色の亀を釣った。この亀を舟の中に置いて寝ると、亀は美女に変身した。そして嶋子を海中の蓬萊山に連れて行き、二人は夫婦になり、三年間をたのしく過ごした。

しかし、嶋子は不意に望郷の念にかられ、亀女の止めるにも拘らず、帰ることになった。女は玉匣(玉手箱)を嶋子に与え、「再びもどってくるなら、決してこれを開けるな」と言った。嶋子が故郷に行ってみると、人も物も遷り変つていた。開けば、嶋子が出かけたのは、三百年前という。嶋子は、約束を忘れて、玉手箱を開けると、彼の若く美しい姿は、風雲とともに天に飛びさり、神女と再び会えなくなつてしまった。

ここで、この二つの話を比較して見よう。どちらにも共通の七つの項目が、同じ順序で並んでいる。

第一は、異郷間の交通という項目である。つまり、羽衣では、天から天女が地上に行くが、浦の嶋子では、人間の男が、海中の仙郷に行く。つまり、一方は女、他方は男が移動し、問題になっている宇宙領域も、一方は天地、他方は海陸であつて、二つの話は細部において異っている。

第二は出会いである。羽衣では、天女は老人夫婦に出会い、浦の嶋子は亀女に出会う。出合いの場は、一方は陸、他方は海である。

第三の共通項目は、親族関係を取りむすぶことである。羽衣では、

天女は老人夫婦と義理の親子関係を結び、浦の嶋子は亀女と夫婦の契りを結ぶ。

第四に豊かな生活という項目がある。しかし、それを享受したのが誰かは、二つの話で違っている。羽衣では、天女がつくった酒で儲けて、豊かな生活を享受したのは養父母である。これに対して、浦の嶋子の場合、蓬萊山で歓待をうけたのは、彼自身であった。

第五は、親子間の感情という共通項目である。しかし、その感情は、二つの話では正反対である。つまり、羽衣では、養父母の方が娘をいじめて追出す。これに反して、浦の嶋子は、彼が実の親を恋しがって、自分の意志で仙郷を立ち去る。一方では、義理の親子関係が問題になっているのに対し、他方では実の親子関係が語られ、一方では子供は娘であるが、他方では息子である。また、どちらも、滞在地から立ち去るが、一方は、他から強制されており、他方は自発的である。このように見事な対照がある。

第六の項目は移動である。羽衣の場合、女は行方定めぬ放浪の旅に上る。ところが浦の嶋子の場合、男が、故郷という目的地向って帰って行くのである。

最後に、第七の項目として、結末がある。羽衣の話では、天女は奈具村にやって来て、心が和み、神となって鎮座した。ハッピー・エンドである。これに対して、浦の嶋子の場合、彼は故郷で家族に再会できなかったばかりか、老人になり、また妻の亀女と再び一緒になることも不可能になった。つまり悲劇に終わっている。

このように見ると、丹後の羽衣と浦の嶋子という二つの話は、互いに一方が他方の変換形という関係にあることが判ってくる。

ところで、この二つの話ともに丹後を舞台にしている。しかし、羽衣は内陸部において展開し、浦の嶋子のほうは、海の世界の話である。この二つの話を対として考えれば、そこには丹後の宇宙像が現われてくる。つまり、宇宙は、内陸と海とから成り、しかもこの二つの外部ないし延長には、天上と海中の蓬萊山という神女の住む世界がある。こういう宇宙の構成が語られているのだ。

#### 四、結 論

以上、中国と日本の二組の事例によって、一つの土地を舞台として語られ、あるいは記録された話のなかには、必ずいつもあるとは限らないであろうが、二つまたはそれ以上の数の話が、互いに一方が他方の変換形という関係にあることが理解できるであろう。かつて私は、「異郷訪問譚の構造」において、多くの異郷訪問譚においては、前半と後半がいわば裏返しとの関係にあり、互いに一方が他方の変換形をなしていることを論じた（大林、一九七九、一九八四、第九章）。本論文においては、私は同一の話ではないが、同じ地域、同じあるいはほぼ同じ時代の二つ、あるいはそれ以上の数の話が、互いに一方が他方の変換形という関係にあることを示してみた。そして、このいわば相互に変換形のある複数の話を併せ考えることによって、その土地における宇宙の構造や、人間社会の構造についての観念をうかがうことができるのである。

私が遠野において、特にこのテーマを選んで講演することにした理由は、すでに皆さんお察しの通りである。言うまでもなく、遠野

を舞台として、柳田国男の『遠野物語』（柳田、一九七六）、佐々木喜善の『老嫗夜譚』（佐々木、一九八六）、『聴耳草紙』（佐々木、一九八六）などの民間説話集が公けにされ、豊富な、しかもしばしば奇怪な話が収められている。

これらの話のなかには、そのつもりで読めば、恐らく互いに変換形の関係にある話が、いろいろ見出されるであろう。このような話をまとめてつかむことによって、たとえば『遠野物語』のコスモロジーは何であるかを考えることができるであろう。ここに豊かな新しい研究の領域がある。皆さんの関心を、このような問題領域にも喚起したい。

〔引用文献〕

駒田信二 一九八二『中国怪奇物語 幽霊編』（講談社文庫）

講談社

大林太良 一九七九「異郷訪問譚の構造」『口承文芸研究』二、

一一九

一九八四『東アジアの王権神話 日本・朝鮮・琉球』

弘文堂

佐々木喜善 一九八六『佐々木喜善全集』第一巻、遠野市立博

物館

竹田晃（訳）一九六四『搜神記』（東洋文庫） 平凡社

柳田国男 一九七六『遠野物語、山の人生』（岩波文庫） 岩

波書店

（おおばやし・たりよう／東京大学）